

# public library 概念についての考察

## 古代ローマで最初の‘public library’を契機として

山本 順一(放送大学・客員教授)

### 1. はじめに

常に個別具体的な事物、現象、それも必ず最先端のものをとらえて研究対象とする癖のあるわたしが、なぜこのような苔むしたペダンチックなテーマを取り上げようとしたのかには理由はなく、ただきっかけだけが存在する。近未来に人智を超えるAIを実現しそうなほど、科学的、合理的に思考する人たちがたくさんいるこの地球において、いまもなおそれぞれの側で不条理な大義と正義を掲げて、内戦が繰り返され、およそ関係のない多数の市民が巻き込まれ、いわれなく生命を奪われている。戦争、ジハード、内戦について考えてみようと思っており、気が向くとその手の本を読む。たまたま昨年(2019)末、手頃な翻訳書が出版されたので、読む気になった。『〈内戦〉の世界史』(デイヴィッド・アーミテイジ著/平田雅博ほか訳、岩波書店、2019)がそれである。

2019年度の授業が終わり、試験の採点、成績処理等の年度末の業務が終わり、ひといきついたところで一気に読んだ。そして、こんな一節に出くわした。

「内戦を思い出すことには常に思い出とともに感情に火をつけ、内戦を再燃させる危険が伴ったのである。われわれはそれを、内戦を書こうとするローマ人の最初の試みの中に、もっとも鮮烈に見ることができる。それはカエサルの子の一人、ガイウス・アシニウス・ポッリオによるものである。弁論家クィンティリアヌスの評価によれば、ポッリオは「あらゆることに習熟した人物」と言われた最初の人だった。作家、政治家、詩人(その中にホラティウス、ウェルギリウスを含む)のパトロンであり、また、ローマの最初の公立図書館の創設者でもあった。」(p.62)

わたしの感性にひっかかった。おそらく‘the first public library in (ancient) Rome’あたりを訳したのであろう。確かに都市国家、ローマ共和国において、リテラシー能力に優れた自由市民に広く開かれた図書館を設置したのであろうから、‘public library’であることは間違いなかろう。‘public library’は、ラテン語では‘bibliotheca publica’(ビブリアーカ・プブリカ)である。

この‘bibliotheca publica’は、今日わたしたちが‘public library’と観念しているものとは必ずしも一致するものではなく、「ユネスコ公共図書館宣言」などに示されている近代公共図書館像は‘bibliotheca publica’との異同を認識することから正確に理解できると考える。平板に世界史の上でポッリオの図書館が現代の‘public library’の先祖であるとは考えないでほしい。

それは安っぽいこの国の図書館史のテキストなどに、マザラン図書館が世界最古、石上宅嗣の芸亭が日本の歴史上最初の‘public library’であるとの理解があやういことに通ずる。図書館に限らず、同種、相似の施設・機関はそれぞれの時代の社会経済的、文化的構造を付度しつつ、立体的、重層的に理解、把握すべきものと考えからである。抽象的理念として論じるのではなく、情報知識への切実で不可欠な必要性和関係づけて考えるべきだと思う。

## 2. ポッリオとポッリオの図書館

### 2.1 ガイウス・アシニウス・ポッリオという人物

ガイウス・アシニウス・ポッリオ (Gaius Asinius Pollio, BC75-BC4) については、‘紀元前 40 年の (ローマ共和国の) 執政官’ という語を括弧書きの見出しにした日本語版ウィキペディアにも掲載されている。そこには、「プレブス (平民) 出身の共和政ローマの政治家・軍人。紀元前 40 年に執政官 (コンスル) を務めた。雄弁家、詩人、劇作家、文芸評論家、歴史家でもあり、歴史に関する著作は失われているものの、アッピアノスやプルタルコスに引用されている。ポッリオは詩人ウェルギリウスのパトロンで詩人ホラティウスの友人としても知られており、両者ともにポッリオを讃えた詩を作っている」とあり、古代ローマの多彩な顔を持つリーダーの一人だということがわかる。‘晩年’ という項目にところで、「戦争での戦利品の利益を使い、ポッリオはアトリウム・リベラティス (*Atrium Libertatis* (自由の館)、フォルム・ロマネムとカンプス・マルティウスの間にあった建物) に、ローマ最初の公共図書館を作った。アトリウム・リベラティスはポッリオが建設した建物で、よく名前の知られたローマの英雄たちの像を展示するものであった。図書館にはギリシア語館とラテン語館があり、その設立はもともとはカエサルのものであったという。図書館には壮大な美術コレクションが付設されていた。ポッリオは、ファルネーゼ・ブル (Farnese Bull) として知られる、かなり贅を凝らした複製の作品群をも含めて、独創性の高いヘレニズム芸術を愛していた。図書館と同様に、美術ギャラリーも一般に公開された」(下線は筆者) と記述され、確かに彼は‘ローマで最初の公共図書館’ (first public library at Rome) を創設した人物とされる。英語版の Wikipedia に飛ぶと、まったく同じ文章で、日本語版はただ翻訳されただけだということがわかる (英語版をみて、一部訳し直し、改変している)。

### 2.2 ポッリオがこしらえた図書館

Kevin M. McGeough の *The Romans: New Perspectives* (ABC-CLIO, 2004, 381p.) の ‘Roman Libraries’ の項目<sup>1</sup>を紹介する。

「図書館は、古代ギリシア、ヘレニズムの時代から知られている。…古代ローマにおい

---

<sup>1</sup> 本稿で参照した外国文献の多くは、Google Books の検索によってえられたものである。このマッグアップの文献もそうである。マッグアップはカナダのレスブリッジ大学 (University of Lethbridge) の地理学部で考古学の教授を務めている。

ては、図書館には2種類のものがあった。私的なものと公的なものである。私的図書館がまず発達をみた。これらの私的図書館にしばしば見られたのは、(ルキウス・リキニウス・) ルクッルス (Lucius Licinius Lucullus, BC118-56) の図書館がそうであったように、ギリシア諸都市を攻撃した後に得た戦利品として得た図書で構成されるものであった。他の私的図書館は、(マルクス・トゥッリウス・) キケロ (Marcus Tullius Cicero, BC106-43) のもののように、図書を購入したり、図書を借りて書写したりしてつくられた図書館である。書店 (bookstores) は本質的に筆者業者 (scriptoria) で、料金をとって図書を書写複製しようとするビジネスであった。しかしながら、エリートたちの間では、通常は図書を借り、事務作業を担当する者に書写させた。(ガイウス・ユリウス・) カエサル (Gaius Iulius Caesar, BC100-44) は、BC44年にローマで最初の public library を建設するとの布告を出した。不幸にして、カエサルは図書館建設に取り掛かる前に殺害された。カエサルの仲間であるアシニウス・ポッリオが彼の思いを引き継ぎ、BC39年の軍事遠征で図書館を造営するのに十分な戦利品を獲得し、ローマで最初の public library を設置した。この図書館に関しては、現在ではその存在についてなにかを伝えるものは一切残されていない。」

### 2.3 ローマの図書館

『図書館史百科事典』の‘古代ローマ’ (Rome, Ancient)<sup>2</sup>の記述をながめることにする。ローマには、古典文学や当時の文化を振興し、保存するという大きな意義をもった多くの図書館が存在したとあるが、ここでも古代ローマの図書館に関する情報は質的にも量的にも乏しく、残存している関係文献の記述や考古学的知見にすぎるといえる。

BC168年、ローマ軍はマケドニア<sup>3</sup>を征服し、軍事的にも政治的にもギリシア世界の後継者に成り上がったが、文化的、学術的にはギリシアはその後ローマを支配した。戦勝したローマの将軍たちが戦利品として持ち帰ったギリシアの文献は流通し、富裕で教養のある自由市民の邸宅内に設置された前記のローマの私的図書館などに蓄積された。そのような図書館を所有 (利用) する人たちの中から、キケロや博物学者としても著名な小プリニウス (Pliny the Younger, Gaius Plinius Caecilius Secundus, 61-112) が育った。しかし、この時代のそのような図書館の所有者は社会的知名度をあげるのには役立ったが、それ以上のものではなかった。こうした社会的文脈において、カエサルが public library を構想し、BC47年に博識の文化人ウァロ (Marcus Terentius Varro, BC116- BC27) にその実現をゆだねるが、BC44年にカエサルが暗殺され、収集された文献は四散し、カエサルの夢はついでた。そして、10年後にポッリオがローマ初の public library を現実のものとしたのである。

<sup>2</sup> Wayne A. Wiegand, Donald G. Davis (eds.), *Encyclopedia of Library History*, Routledge, 1994. ‘古代ローマ’の項目は Christopher Murphy の筆で、pp.555-556.

<sup>3</sup> よく知られていることであるが、アレクサンダー大王を産み出した (古代) マケドニアは 2019年に国名を改めた北マケドニアと一致するわけではない。

オクタウィアヌス (BC63-AD14) がアウグストゥスとなり、ローマが帝政に移行してからは、歴代の皇帝は図書館に対して国家的な支援 (state patronage of libraries) を行った。とりわけトラヤヌス帝 (Trajan, AD53-117) は AD114 年にウルピアン・ライブラリー (Bibliotheca Ulpia = "Ulpian Library") をローマに開設し、これはアレクサンドリア図書館が 3 世紀に破壊された後は西欧世界最大の図書館となった。4 世紀中葉には、ローマ市内には 28 の 'public library' があったといわれる。もっとも、歴代皇帝が設置管理した図書館に限らず、当時、小プリニウスが故郷北イタリアのコモに遺贈した図書館などもあり、フランス、北アフリカ、ギリシア、小アジアなど各地に図書館は存在していた。

### 3. 一応の結論： 古代における 'Public Library' 概念の内実

'public library' という言葉に接すると、図書館の関係者も含めて多くの人たちは、半ば反射的に '開かれた図書館'、日本語に置き換えると '公共図書館'、ひどい人に至っては '公立図書館' のイメージを持ってしまう。

確かに、ローマで最初の 'public library' を設置したポッリオも、そして古代ローマの文化人で、近代までその著作が高等教育のテキストに用いられたキケロは平民からの成り上がりである。'public library' を利用して、賢くなれば階層上昇ができる。古代でも図書館を利用すれば、'アメリカン・ドリーム' ならぬ 'ローマン・ドリーム' が実現していた、と理解すれば、それは大間違いである。

1850 年、イギリスの議会において、ブラザートン (Joseph Brotherton, 1783-1857) が読書の普及は犯罪を減少させるであろうし、公共図書館の供給は「推測される場所では、最も安価な警察 (cheapest police) を提供できる」であろうと論じた。また、他の者たちは、公共図書館をつくれれば、労働者たちを安酒のジンを販売する店に通うという悪癖から救うことができると主張した<sup>4</sup>。アンドリュー・カーネギー (Andrew Carnegie, 1835-1919) や、近いところではエリック・ホッファー (Eric Hoffer, 1902-83) のような立志伝中の人物を育てるところがまさに図書館と思われるであろう。

そうではない。キケロや小プリニウス、オクタウィアヌスなどもギリシアに留学 (遊学?) し、学んだ経験を持つ。しかし、このような高度な著述を残せる歴史的人物は例外中の例外。ギリシアの偉大な哲人、ソクラテス (Socrates, BC469-399) は口先だけの人だったとされる。オーラル文化でやっていけるのは、ローマ時代も同じだった。この時代の識字率の統計はなく、推計も難しい。識字能力は大きく偏在し、社会は教育機会にも恵まれていなかった<sup>5</sup>。教養のある上流、中流階層に属する少数の人たちで、当時の小さな学問の世界 (scholarly community) に属する人たちだけが 'public library' を利用できた。そう、古代ローマの 'public library' は近代公共図書館とは切断された古代社会のアクセサリーだった。

<sup>4</sup> Miriam A. Drake (ed.), *Encyclopedia of Library and Information Science*, 2nd ed. vol.3, Marcel Dekker, 2003, p.2381.

<sup>5</sup> 'Ancient History & Civilization' <<https://erenow.net/ancient/ancient-greece-and-rome-an-encyclopedia-for-students-4-volume-set/257.php>>